

日本スポーツ学会大賞について

日本スポーツ学会事務局

「日本スポーツ学会大賞」は、日本スポーツ学会独自の視点によって日本のスポーツ界へ貢献された個人・団体を表彰する制度で、2010年に創設されました。

受賞者および受賞団体の選考基準は、「スポーツ界に多大な貢献をしていること」、「受賞の対象となる活動が長期間にわたっており、なおかつ、その活動が後生に好影響を及ぼしていること」、「授賞式当日に会場へ来場し、スピーチ等の講演ができること」の3点で、これらを満たしていればその肩書きや、個人か組織・団体かは問いません。過去の受賞者と授賞理由は以下の通りです。

これまでの受賞者（敬称略、所属・肩書等は受賞当時）

第1回（2010年度）

坂田信久と日本テレビ箱根駅伝中継スタッフ

実現不可能と言われた箱根駅伝の完全生中継を実現し、日本のスポーツ文化の醸成やスポーツ中継の発展に多大なる貢献をされた。

※ 受賞記念講演では、坂田氏とともに歴代チーフディレクター（田中晃氏、新井直彦氏）からもお話を伺いました。

第2回（2011年度）

国枝 慎吾／プロ車椅子テニスプレイヤー

日本初のプロ車椅子テニスプレイヤーとして世界的に活躍するとともに、日本の障がい者スポーツの発展に大きく寄与された。

第3回（2012年度）

柳澤 久／三井住友海上火災保険株式会社 女子柔道部監督

女子柔道の創設期から指導に関わり、多くの名選手を育てるとともに、女子スポーツの発展に多大なる貢献をされた。

第4回（2013年度）

落合 博満／元中日ドラゴンズ監督、日刊スポーツ評論家

長きに渡り野球界で活躍するとともに、独特の鋭い視点でプロ野球の評論・講演活動に新たな境地を切り開いた。

第5回（2014年度）

岸本 健／株式会社フォート・キシモト 代表取締役社長

日本初のフリースポーツフォトグラファーとしてスポーツ写真の黎明期から幅広く活躍し、日本のスポーツ報道や教育などに多大なる貢献をされた。

第6回（2015年度）

賀川 浩／サッカーライター

長期に渡る取材活動や記事の執筆などを通じ、スポーツジャーナリズムのみならず日本のサッカーやスポーツの振興・発展に多大なる貢献をされた。

第7回（2016年度）

今西 和男／元サンフレッチェ広島・F C岐阜 GM、吉備国際大学教授

サッカーを通じて社会性や人間性に富んだ人材を育成するとともに、日本のサッカーとスポーツの普及・振興に尽力されてきた。

第 8 回（2017 年度）

田 臥 勇太／プロバスケットボール選手（B.LEAGUE・栃木ブレックス所属）

日本人バスケットボール選手のパイオニアとして国内外のトップレベルで活躍を続け、日本のバスケットボール文化の発展に多大な貢献をされてきた。

第 9 回（2018 年度）

猪谷 千春／IOC 名誉委員、JOC 名誉委員

日本人唯一の五輪アルペンスキーメダリストであるだけでなく、数多くのオリンピック・スポーツ関連団体にて要職を務め、スポーツを通じた国際平和の実現に向けて尽力されてきた。

第 10 回（2019 年度）

林 敏之／元ラグビー日本代表、特定非営利活動法人ヒーローズ代表

神戸製鋼、日本代表の中心選手として現在の日本ラグビーの礎を築くとともに、子ども世代におけるラグビーの普及・振興に長く尽力されてきた。

第 11 回（2020 年度）

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、開催見送り

第 12 回（2021 年度）

佐々木 洋／花巻東高等学校硬式野球部監督

菊池 雄星／プロ野球選手（同校硬式野球部出身、2021 年シアトル・マリナーズ所属）

大谷 翔平／プロ野球選手（同校硬式野球部出身、ロサンゼルス・エンゼルス）

菊池選手、大谷選手は岩手県花巻市の高校から世界へと羽ばたき、MLB オールスターに同時選出されるなどコロナ禍で苦しむ世界の人々を圧倒的なパワーとエネルギーで魅了し、多くの希望と感動を与えた。佐々木監督においては、両選手をはじめとする野球を通じた人材育成に尽力し、日本の教育とスポーツ界発展に多大な貢献をされた。

第 13 回（2022 年度）

帝拳ジムならびに**帝拳プロモーション**

村田 諒太／プロボクサー（元 WBA 世界ミドル級スーパー王者・ロンドン五輪ミドル級金メダリスト）

帝拳ジムは、数々の名選手を育成・輩出するとともに、日本を世界屈指のボクシング大国に導くフェアな興行を行ってきた。同ジムの象徴的存在である村田諒太選手は、五輪とプロの栄冠を勝ち取っただけなく、強さとフェアプレー精神を持ち合わせた活躍で日本のスポーツの品位を大きく高めてきた。

第 14 回（2023 年度）

村上 雅則／元プロ野球選手、日本人初のメジャーリーガー

日本人で初めてメジャーリーグでプレーするなど、球界の発展に多大な功績を残すとともに、難民支援をはじめとした様々な社会貢献活動にも長く取り組み、日本と世界をつなぐ架橋という大役を務めてこられた。

第 15 回（2024 年度）

王 貞治／元プロ野球選手、一般社団法人 世界少年野球推進財団 理事長

現役中の 1960 年から約 30 年間、札幌遠征のたびに市内の養護学校を訪問するなど社会貢献活動に長く取り組み、引退後も 30 年にわたって世界少年野球大会の開催に尽力され、野球を通じて友情の輪を広げ、未来へ繋がるスポーツの平和推進に貢献された。

第 16 回（2025 年度）

竹見 昌久／一般社団法人日本デフ陸上競技協会 事務局次長、東京都立中央ろう学校 主幹教諭

長年にわたってろう者への陸上競技指導に深く関わり、「障がい者も健常者も平等で公平な競技環境を」という願いのもと、デフリンピックでも採用された「スタートランプ」の開発と普及に尽力されてきた。

以上